

第十九回(二〇一九年)  
島木赤彦  
「童謡」コンクール  
作品募集のご案内

応募要項

一．内容

赤彦童謡のようにな、身近な作品に取  
赤彦の時代を懐かしむような作品では  
なく、現代の生活や風景などを題材に  
する。島木赤彦全集・岩波書店に  
第六巻掲載の童謡作品をご参考に

二．形式

四百字詰原稿用紙二枚以内(何連でもよい)  
一人一編  
最初の行に題名  
①児童・生徒は  
②一般組・氏名(ふりがな)  
③末尾に住所・電話番号(他は自由(パソコン・ワープロも可))

三．締め切り

十月二日(水) 当日消印有効

四．応募方法

① 富士見町立富士見小学校事務局長野九郎諏訪郡富士見町富士見四五六  
は、児童・生徒は、学校でまとめた、学年また  
は、学級別に学年の児童も氏名は漢字、ゴ  
都合上、低学年の児童も氏名は漢字、ゴ  
ム印可)を添付して、児童も氏名は漢字、ゴ  
へお送ください。③は、ふりがな  
の記載も構いません。④は、ふりがな  
① 富士見町立富士見小学校事務局長野九郎諏訪郡富士見町富士見四五六

主催

下諏訪町教育委員会  
島木赤彦研究会

後援

信濃毎日新聞社  
長野日報社  
市民新聞グループ  
エルシーブイ株式会社  
島木赤彦研究会長野県支部

五．賞

※ ③ 下諏訪教育委員会事務局  
② 下諏訪町立赤彦記念館  
① 下諏訪町立赤彦記念館  
小学校低・高学年、中学校、一般の部  
それぞれ以下の賞を贈ります。優秀賞二点  
・優良賞・佳作 それぞれ若干名  
・島木赤彦研究会(本会・長野県支部)  
・下諏訪町教育委員会・諏訪国語教育学会

七．発表

一月二十五日(土) 後援する新聞紙上に掲載。

八．その他

・応募作品は、返却しない。  
・応募作品の著作権は当研究会に  
・校内に展示した作品のコピー等原  
稿用紙(た)以外の作品の応募も認めま  
す。(応募していない作品に限る)

※ 第十一回から第十五回までの作品と楽譜の合冊集

の残部が少しあります。ご希望の方は郵便小集  
替八円分(郵送料込)を添えて、①までお送り  
ください。

【小学校低学年】  
 はじめてのおつかい  
 「牛にゆうがのみたいよー」  
 いもうとがないうている  
 「おわっっちゃったの」めんね」  
 おかあさんがこまっている  
 そうだ わたしが買いに行こう！  
 はじめてのおつかい  
 ずっと行きたかったおつかい  
 わくわく どきどき  
 車にきをつけて行ったよ  
 一本でいいよと言われたけど  
 ほめてほしいから二本買ったよ  
 あめも一つだけ買ったよ  
 かえりは長いのぼりざか  
 せなかのリュックがおもたいな  
 セミがミンミンおもたいな  
 おうちがみえたあとちよつと  
 おかあさんが手をふっている  
 二本の牛にゆうに  
 やったー びっくりするかな？  
 「二本も買ったの？ありがとうぞ」  
 おかあさんがほめてくれたよ  
 「牛にゆうおもしろい」  
 いもうともうれしそう  
 はじめてのおつかい 大せいこう  
 たいへんだったけど よかった  
 よろこんでくれて よかった

【小学校高学年】  
 きらめく砥川にアマゴを放そう  
 命を育てる雪解けの水は  
 遠く深い山々から  
 春の諏訪湖へのおくり物  
 きりの中で深呼吸をしよう  
 心がすみずみまで洗われるから  
 木道のわきの草花がほほえむ  
 静かな夏の八島しつ原  
 友達とモミジの道を歩こう  
 あざやかな木々の間を  
 風に乗って走り抜けた思い出  
 燃えるような秋の八ヶ岳  
 胸おどらせてリフトに乗ろう  
 真下に広がる銀世界  
 遠くの山はだにうかぶハート  
 きりがみねは冬の中

秋風あなたを呼んだとき  
 かなしさうれしさ待っている  
 冬風あなたを呼んだとき  
 別れの寂しさ待っている  
 風があなたを呼んだとき  
 きつと何かが待っている  
 【一般】  
 合掌野仏さん 野仏さん  
 若い緑に目を細め  
 代田の畔に座っている  
 姿逆さまに水田に映っている  
 青田の無事を祈っている  
 炎天の下の野仏さん  
 祭りばやしを遠い音に  
 耳を澄まして座っている  
 小川で遊ぶ子供を  
 無事に育てると見つけている

【中学生】  
 風の声  
 誰かが呼んだ風の声  
 春風あなたを呼んだとき  
 新たな出会いが待っている  
 夏風あなたを呼んだとき  
 思い出さばい待っている

秋日の紅葉に包まれて  
 草の紅い顔で包まれている  
 凜々しい稲田で  
 黄金の稲田で見渡している  
 豊年万作 確かめて  
 冷え込む朝の野仏さん  
 頭に白い霜の野仏さん  
 寒さに耐えて霜の野仏さん  
 春の訪れを待ちながら  
 満天の星を数えている

《参考作品》

夕方

母さん帰りが  
 おそいのか  
 夕日が暮れるが  
 早いのか  
 門のそとまで  
 出て見れば  
 三日月さまは  
 もう落ちて  
 田には蛙の  
 声ばかり

つらら

草家軒ばに  
 つららが下る  
 草家低くて  
 つららが長い  
 つららつらつら  
 日が出て光る  
 光きらきら  
 障子にうつる  
 やってきたのは  
 郵便くばり  
 頭かしげて  
 つららをくぐる

どんぐり

どんぐり山の  
 どんぐりは  
 落ちても落ちても  
 草の中  
 どんぐり山の  
 枯草は  
 分けても分けても  
 分けきれぬ  
 草を分ければ  
 手がひえる  
 どんぐり拾えば  
 日が沈む